

明治以降の擬洋風建築から見た 日本と諸外国の異文化交渉史

伊藤 遥

(山崎 美紗子ゼミ)

目次

はじめに	
テーマ設定の背景	
第1章 序論	1-1. 擬洋風建築の定義 1-2. 擬洋風建築についての議論 及び先行研究
第2章 本論	2-1. 文明開化 2-2. 擬洋風建築の流行 2-3. 擬洋風建築の例
第3章 結論	3-1. 文明開化との関係性 3-2. 擬洋風建築や洋風建築の保 存活動
おわりに	

はじめに

「洋風建築」と聞いて思い浮かべる日本の建物は、東京の人ならば「東京駅」、関西の人ならば「中之島図書館」や「大阪府庁本館」が多く挙げられるのではないだろうか。もしくは、洋風建築を説明するときに一番ピンときやすいのがこれらかもしれない。しかし、人々が洋風建築に興味を持つまではそれらの建物は一風景に過ぎず、それらが作り上げられた歴史の流れや世界との交流、当時を生きた人々の努力は全く想像できないだろう。近年、洋風建築の中でも保存状態の良いものはレストランやカフェに改装され、当時の趣を残したまま、気軽に人々が利用できるようになっていく。例えば、京都の八坂神社を抜けた先、円山公園の和風然とした風景の中に突然現れる大きな洋館、煙草王と謳われた村井吉兵衛の建てた長楽館という迎賓館である。長楽館は1909（M42）年にアメリカ人建築士であるJ・M・ガーディナーによって建築され、当時は国内外の賓客をもてなす為の迎賓館として使用されていた。伊藤博文や大隈重

信など、明治時代の様々な著名人がこの長楽館を訪れた、歴史的にも意義のある場所である。現在はレストラン・カフェになっており、京都の人々の憩いの場となっている。それらの現代に生きる洋風建築に触れ、興味を持つ人々も少なからずいるのではないだろうか。その興味が、洋風建築、擬洋風建築の建物だけではない明治時代の風俗や政治的施策、それらに大きく影響を及ぼした諸外国の存在に深く関心を抱くまでになれば、この分野がいかに現代に色濃く影響を残し、重要なものであるか改めて認識されるだろう。

この論文では、明治時代以降の建築物を通して、日本が諸外国からどのような影響を受け、現代につながられていったのか、時代背景、政治的施策、国際社会の面から検証し、展開していく。さらに、それらの建築物が現在どのように保存・保護されているかをまとめ、それらの活動についても述べる。

第1章 序論

1-1. 擬洋風建築の定義

擬洋風建築の定義は、洋風建築という建築様式が成立してこそ説明づけられるものであり、非常に曖昧で不明瞭な点が多く、研究者によってその定義がずれることもまま見受けられる。

ここでは、先行の研究者の言葉を引用しつつ、筆者の考察も含め改めて擬洋風建築という言葉で定義づけしていく。

まず、ノートルダム清心女子大学の上田恭嗣^(注1)によると

「擬」という言葉には、「なぞらえること、型取り、似せること」といった意味があり、西洋建築を似せて造った建物を「擬洋風建築」と称しました。現代の建築が発展する中で、擬洋風建築はこれまであまり評価されてきま

せんでした。しかし、この建築スタイルは、日本の大工さん達が明治以降の文明開化の中で、西洋の建築に憧れ、日本の大工技術で工夫を凝らして西洋に負けじと考え出したものです。これまでの木造建築の技術で工夫を重ね、世界に類のない素晴らしい建築様式を編み出したと考えています。

とあり、擬洋風建築には先述したアメリカ人設計士が設計した長楽館のような建物は含まれないと考えられる。また、様々な明治建築が移築・保存されている博物館明治村^(注2)の概要には

民家や地方の建築までは、外国人の手が及ばなかったが、地元の志ある工匠によって、見よう見まねで、洋風建築が建てられた。それは和魂洋才の、日本の伝統的技術を駆使して、木と漆喰などを使った和洋混交のものであった。これらの様式は擬洋風とも呼ばれている。

とあり、外国からのお雇い建築士・設計士はもちろん、正式に西洋建築を学んだ辰野金吾をはじめとする建築士が携わった建築も、擬洋風建築の範囲内には含まないとされている。さらに、兵庫県三田市にある旧九鬼家住宅の保存活動を行っているNPO法人歴史文化財ネットワークさんだ^(注3)によると、

擬洋風建築は明治の建設当時から「擬洋風」と言われてきたわけではありません。昭和になって一部の建築史研究者が、こうした一群の建築物を擬洋風建築と呼ぶようになり、それが定着していったものです。

とあり、擬洋風建築という言葉がごく最近に発現したものがわかる。

しかし、これらの定義も曖昧なところがあり、例えば現在も建築会社として有名な清水建設HP^(注4)は

二代清水喜助が手掛けた三大擬洋風建築は、またたく間に東京の新名所となり、多くの錦絵が描かれました。錦絵は、手軽な土産として持ち帰られ、各地の棟梁や職人たちが、擬

洋風建築を学ぶ教材となったのです。そして、明治中ごろにかけて、全国で擬洋風建築が建てられました。

とあり、築地ホテル館に関しては擬洋風建築の範囲でありながら、基本設計はアメリカ人建築士のリチャード・P・ブリジェンスが担当している。この点だけを取り上げるならば、築地ホテル館は擬洋風建築ではないということになるが、実施設計を清水喜助が担当しており、こちらは日本人大工なので、擬洋風建築の範囲内であるということになる。確かに、基本設計を忠実に守りつつ日本の風土に合った設計に練り直して施工するという点で大工たちによる日本オリジナルの建築様式と言えるだろう。

反対に、擬洋風建築の対義語として挙げられるのが正統的洋風建築である。前掲博物館明治村(注2)によれば、

西洋から建築家を招いて、彼等に主要な建築、例えば国会議事堂などの設計も依頼している。明治10年来日のコンドルは、工部大学校造家学科の講師として、次代を担う日本の建築家を育成した。一方彼は、政府の要請で、鹿鳴館、帝室博物館を設計し、ニコライ堂、岩崎邸から海軍省までも手掛け、日本における正統的洋風建築の数々を建築した。

とあり、主にアメリカから設計士を招いて国家事業として日本の西洋化、国際化が成されていたようだ。

これらのことから、擬洋風建築という言葉をはっきりと定義するとすれば、日本古来の建築技術を用いて、日本の大工たちが見様見真似で設計・施工したものを擬洋風建築と言ひ、西洋の建築様式に合わせて作られた外国人設計士の設計案を日本の風土に合わせた設計案に修正・施工したのもも擬洋風建築に分類されるということがわかった。

1-2. 擬洋風建築についての議論及び先行研究

先述の通り、擬洋風建築は言葉自体が昭和以降に出現したものである為、その定義・研究についてもまだ発展途上と言っていいだろう。では、そ

の発展途上の擬洋風建築を研究対象としている建築史家たちは具体的にどういった議論を展開しているのだろうか。

建築史家で建築家でもある藤森照信は自身の著書『近代日本の洋風建築〈開化篇〉』^(注5)のなかで

木の建築を空気のように吸って育った日本人の大工が、突如、石に由来する西欧2二〇〇年の時間が刻まれた異質の建築と接触して鳴らし得たのが不協和音であったからとて、それは当然であって、それが不協和音であることを指弾するよりも、にもかかわらず、民のレベルにおいてすら、二つの文明の接触の音を響かし得る主体性が存在したことを評価すべきなのである。擬洋風建築を響かし得た日本の大工の主体性は、おそらく、「職人の世紀」江戸時代が準備してくれていたものである。

と述べている。非常に抽象的な表現であるが、擬洋風建築を批判する建築史家や建築家たちの指す「不協和音」とは、擬洋風建築が文明開化という急速な風俗改革とも言える明治日本の国際化がもたらした過剰なまでの洋風へのすり合わせだと主張しているのだ。我々現代人は江戸～明治を自分の足で歩いて時間を過ごしてきたわけではない為に「江戸時代」「明治時代」と明確な線引きをもってして理解し、割り切ることができるが、その時代を生きてきた当時の人々にとっては、幕府による政治が終わり、新たに天皇主権となって明治という年号を与えられたからといって、自身の生活が魔法のように全て近代のものに入れ替わるわけでは無い。つまり、近代化といっても順次行われていくものであり、大袈裟に例えるなら右を見れば江戸から残る武家屋敷、左を見ればレンガ造りの洋風建築という非常にアンバランスな状態で確かに「不協和音」と表現するに足るかもしれない。しかも、国家プロジェクトとして施工されていた正統派洋風建築ではなく、それらを見様見真似でさらに（擬洋風建築を批判する建築史家たちからすれば）無理やりすり合わせた擬洋風建築はもって「不協和音」に感じられるだろう。しかし、藤森照信は、町の大工や左官屋らが見様見真似でつくり上げた擬洋風建築を「不協和音」として捉え

るのではなく、見様見真似のレベルにも関わらず和と洋を上手く馴染ませあい、それらを1つの建築物として完成させた彼らの技術力や応用力、さらに実行力を評価すべきだと主張したのだ。

このように、擬洋風建築に対する見解は建築様式の構造上の優劣はさておき、それらを構築した民衆らによる文明開化という自国の急速な国際化に対する敏感さと適応能力が主に評価されているが、実際、擬洋風建築の構造はどのように展開されていったのだろうか。

まず、擬洋風建築は大きく分けて「木骨石造系擬洋風」と「漆喰系擬洋風」、「下見板系擬洋風」の三つに分けることが出来る。これらを詳しく紹介していくと本格的に建築の領域に入ってしまう為簡略化するが、三つともに基本的に名前の通りである。

はじめに、「木骨石造系擬洋風」はアメリカから流入した木骨石造という建築様式の代わりにナマコ壁を用いたもので、あくまで「それ風」である。次に、「漆喰系擬洋風」は土壁の上に厚く漆喰を塗り、白く仕立てたものである。この漆喰はこの時代の洋風建築の代名詞ととれるだろうヴェランダやアーチのついた玄関などの柱飾りなどにも用いられた。最後に、「下見板系擬洋風」は、漆喰の代わりに下見板を張り、その上からペンキで仕上げている。擬洋風建築の流行した建築様式を時系列順に説明したが、擬洋風建築のピークは「漆喰系擬洋風」であり、この建築様式が特に各地に多く見られ、現存もしている。そして、「下見板系擬洋風」で明治期の擬洋風建築の流行は打ち止めとなる。

このように擬洋風建築は日本の気候や風土に適応していない西洋建築の建築様式を、自国の気候・風土をよく分かっている日本人が経験をもってして代用を重ねて進化していったものだと思うられる。ところで、「下見板系擬洋風」で擬洋風建築は打ち止められてしまうのだが、これは単なる流行の廃りではなく、産業革命が大いに関係した理由がある。擬洋風建築が流行した1866（慶応2）年～1890（M23）年頃までの間は丁度世界的に見ても産業革命期と重なっており、こうして日本で西洋館が流行している間にも建築用の鉄やコンクリート、ガラスといった近代的な材料がもたら

されていた。しかしこれらは建築の表現上大きく取り上げられず、建築様式自体は旧時代で懐古的なルネッサンス以降の歴史主義建築であった。しかし、二十世紀に入るとモダニズム建築がもたらされることになる。その始まりがアール・ヌーヴォーであり、これは歴史主義建築のように堅苦しいルールはなく、表現がより自由なものになっていったのだ。アール・ヌーヴォーとして建築の型を自由にしたのは、他にもない産業革命がもたらした鉄やコンクリート、ガラスなのである。これにより、建築様式が徐々に変化していった。でこぼこした柱や壁は平面的になり、装飾も少なくなっていた。

歴史主義建築の流入による洋風建築流行から、モダニズム建築へ着地するまでの大まかな流れはこの通りである。

ここからは考察だが、歴史主義建築を前提にルールに基づいて建てられた正統派洋風建築に比べ、それらを何のルールも知らず見て学び、自身の手元にある材料と技術で応用して作られた擬洋風建築もある種の自由の元に建てられたものであるならば、結果論ではあるが、モダニズム建築と同じだけの要素を持っていたのではないだろうか。だとするならば、明治期を活気づかせた日本の大工や左官屋たちは、図らずも擬洋風建築からモダニズム建築という未来を見据えていたようにもとらえられる。

第2章では本論として、前述の擬洋風建築の定義・議論・先行研究を前提に自身の考察も交え、具体的に擬洋風建築の例を挙げ、日本の風土・文化・時代・政治・諸外国との異文化交渉の側面から解説していく。

第2章 本論

2-1. 文明開化

日本の文明開化は中高の日本史の教科書で習う通り、明治時代に移行してから様々な海外文化が流入し、これまでの日本の風俗と混ざり合い、国際化されていく様を指す。しかし、ここでは建築から見た文明開化について記述したい。

まず、建築における文明開化という点からならば、スタート位置がより明確になる。

前段階として、諸外国による開国命令を続けて振り払い続けてきた日本にしびれを切らしたアメリカ艦隊の襲来、つまりペリー司令長官による黒船襲来がそもそもの始まりである。この翌年1854（安政元）年の1月に再び来航したペリーによって日米和親条約が結ばれた。その後1858（安政5）年に、日本と貿易をしたがったアメリカから派遣されたアメリカ総領事のハリスと大老井伊直弼によって日米修好通商条約が締結された。この条約の中には「神奈川・長崎・新潟・兵庫の開港」と「開港場に居留地を設け、一般外国人の国内旅行を禁じる」というものがあり、これが日本での西洋館誕生の大きな一歩となる。

事実、やはり神奈川・長崎・新潟・兵庫と開港された4港付近には有名な西洋館が多く残されており、これらを参考に大工や左官屋は擬洋風建築を確立させていったのだろう。

こうした中で、日本に西洋文化がもたらされた経緯の詳細は、「建築史」編集委員会編著『コンパクト版建築史 日本・西洋』^(注6)には

開国直後の課題は、軍事技術の習得とその開発であった。幕府はオランダの指導を受け、1861（文久元）年、長崎の飽の浦に長崎製鉄所を開設し、軍艦の建造を始めた。江戸近郊でも軍艦を製造するために、長崎に続き、1865（慶応元）年、横須賀製鉄所建設を開始した。

とあり、これらは西洋人技師によって指導され、機械もすべて輸入品だった。こうして西洋人が日本に移住し、居留地で暮らすようになり、ここに多くの西洋館が建てられた。こうして、日本の近代化が進められた。

明治時代に入り、新政府は富国強兵を掲げ、殖産興業に尽力したこともあり、日本の近代化はますます進行していった。前掲『コンパクト版建築史 日本・西洋』^(注6)には

当初、国の官庁営繕事業は、大蔵省土木寮が中心となっていたが、1870（M3）年に工部省が設置され、お雇い外国人を採用して、欧米の技術を吸収しようと試みた。また、当時

の主要な輸出産業であった生糸の品質向上と生産量増大を目指し、1872（M5）年に官営の富岡製糸場を建設した。

とあり、この時代において殖産興業の効率を上げる為には西洋化された環境が必要だった為に、これらの西洋建築がより効率的だったということと、実際にここで働く西洋人の為など様々な観点から西洋館という存在は必要不可欠だったのだろう。

ところで、官庁営繕事業やお雇い外国人らが手掛けた、擬洋風建築以外の建築物を正統的洋風建築として記述しているが、それらにはどのようなものがあったのか、ここで例を挙げて説明していきたい。

まず、長崎県長崎市に建築されたグラバー邸だ。これは長崎県長崎市になるという点からもわかるように、日米修好通商条約により定められた外国人居留地の西洋館である。これは明治維新以前の1863（文久3）年に建てられたもので、設計者は残念ながら不明。イギリス人貿易商人のT.B.グラバーが建てた自邸であり、現存する中で最古の外国人住宅である。

次に、先述した富岡製糸場だが、これは明治維新後の1872（M5）年に群馬県富岡市に、政府から依頼され、E.A.セバスチャンが設計を手掛けた。木骨レンガ造で作られた大規模な工場建築である。2014（H26）年4月26日に世界遺産として正式に登録され、盛り上がりを見せたのは記憶に新しい。

次に、文明開化のシンボルとして挙げられるのが、東京都千代田区に建てられた鹿鳴館である。これは、1883（M16）年にJ.コンドルが設計したもので、現在は残念ながら現存していない。前掲『コンパクト版建築史 日本・西洋』^(注6)によると、

文明開化のシンボルとして知られる社交クラブ。条約改正を目論む政府の欧化政策の一環として建てられた。

とある。ここでの条約改正とは、江戸時代に幕府が諸外国の圧に負け、日米修好通商条約という不平等な条約を結んだことにより、日本は開国し文

明開化を果たしたが、各国列強の仲間入りとはいかなかった。その為、鹿鳴館という紳士淑女が集う社交場を作り上げ各国列強に、日本にはそれだけの資産や技術力があり、肩を並べられる存在だということをアピールし、不平等に締結された日米修好通商条約やその他列強との同類の条約を両国とも平等なものに改正したかったということだろう。

こうして、文明開化という新時代の始まりに、西洋建築は必要不可欠な存在として招き入れられたわけだが、先述したとおり、日本も各国列強と肩を並べるならばずっとお雇い外国人らに力を貸してもらっているわけにはいかない。確かに、擬洋風建築という形で日本の大工や左官屋が洋風建築を模したものは造り上げていったが、実際にしっかりと学んだわけではなく、西洋建築を正しく理解し、それを日本の材料や技術で造り上げられる建築家が必要になってきた。そこで登場したのが、1879（M12）年に鹿鳴館をはじめとする様々な官営建築を手掛けたJ.コンドルを迎えて開校した、日本初の建築教育機関、工部大学校造家学科である。これは現在の東京大学建築学科にあたる。この教育機関で学び、初の日本人建築家として世に出て行ったのが、辰野金吾、片山東熊、曾禰達蔵、佐立七次郎の4人である。

この4人の建築家により、日本の西洋建築はさらに進化し、世界と同じくしてアール・ヌーヴォーと出会い、徐々に歴史主義建築から脱出し、最終的にモダニズム建築へと到達するのである。

2-2. 擬洋風建築の流行

文明開化による西洋建築の流入は先述の通りだが、西洋建築も正統的洋風建築だけで流行が成り立った訳ではないことはこれまでの論述の中でも明確だろう。では、流行の一端を担った擬洋風建築はどのようにしてその及ぶ範囲を広げていったのだろうか。

始まりは、やはり日本に西洋館のありどころとして居留地という地区がいくつも出来たことだった。特に横浜の居留地の発展は目覚ましく、当時の人々に大きく影響を及ぼした。現在も建設会社として運営されている清水建設の二代目である清水喜助は、第1章で述べた擬洋風建築の建築様式の

一つである、木骨石造系擬洋風の開祖とされている。前掲清水建設 HP^(注4)によると、

当社の二代目店主 清水喜助は、時代の変化を感じ取り、今後の主流が洋風建築になると見越し、開港場・横浜で、その技術習得に取り組みました。そして、日本の伝統的な建築技術を基礎に、和洋折衷様式の擬洋風建築を生み出し、日本の近代建築の先駆けとなる3つの建物を完成させました。それが「築地ホテル館」、「第一国立銀行(旧三井組ハウス)」、「為替バンク三井組」です。

とあり、また、藤森照信は『日本の近代建築(上)幕末・明治編』^(注7)の中で

横浜では和洋折衷がよしとされていたのである。(中略)もしこうした和洋折衷の表現が横浜だけにとどまったなら、開港場という小さな外国の例外的出来事として日本の近代建築史上からは忘れられたにちがいないが、しかし、好奇心いっぱいの一人大工がこのやり方を居留地の柵の外に持ちだしてしまった。

とある。つまり、居留地の内側で行われていた和洋折衷という異端であり日本でしか変化し得なかった例外的な建築様式が、居留地に足を踏み入れた好奇心旺盛な清水喜助という一人大工によって世間に放たれたのだ。

しかし、ただの一大工が和洋折衷のイレギュラー的な建築様式を知ったからといって世間に大きな影響を残せるとは考えにくい。そこで登場するのが R.P.ブリッジンスという外国人建築家である。前掲『日本の近代建築(上)幕末・明治編』^(注7)には

チャンスとして大きかったのはブリッジンスとの出会いだった。“ブリッジンス党”に加わることで、喜助は、当時としては日本では一番洋風建築に詳しい大工棟梁になることが出来た。(中略)ヨーロッパ風でも伝統的でもない全く新しい日本独自の洋風建築を作りあげよう。武器となるのは、10年近い横浜ぐらして有効性を学んだ〈木骨石造〉

〈ヴェランダ〉〈ナマコ壁〉〈日本屋根〉の四つ。とりわけ日本屋根は、江戸の建築になじんだ喜助にとっては切り札になるだろう。

とあり、清水喜助が擬洋風建築の第一歩を踏み出したことは明確である。

このように、日本の建築史に大きな功績を残した清水喜助だが、擬洋風建築を流行させたのは清水喜助だけでは無い。

清水喜助に一步遅れを取った形ではあるが、林忠恕という大工が横浜から和洋折衷のイレギュラー建築を持ちだしており、この人物もブリッジンス党に加わっていた。林忠恕がいつどのようにしてブリッジンス党に加わったのかは定かでないが、明治に入ると大蔵省営繕寮に雇われ、新政府の建築技術者として働いた。前掲『日本の近代建築(上)幕末・明治編』^(注7)によると、

清水喜助のいかにも擬洋風っぽいまがまがしい作風に比べ、林の作品は、本当の西洋館と擬洋風のどっちつかずの宙吊りの状態(中略)しかし、中央官庁の建築だけの各地への影響は少なくなかった。

とあり、清水喜助だけでなく林忠恕もこの時代の西洋化に一役買っていたのがわかる。さらに、前掲『日本の近代建築(上)幕末・明治編』^(注7)には、

技術に比べ、林の官庁スタイルの方ははるかに広く全国各地に伝えられ、明治期を通して、車寄せだけ強調したパラメディアンイズム崩しの構成は地方官庁の定型として生き延びてゆく。

とあり、細かい建築様式のことはともかく、国を挙げて建築物の西洋化を図り、その中で擬洋風建築が大きな要素を担っていた時期があることは明確である。

このように、幕末に各開港場の居留地やその近辺に上陸した諸外国の歴史主義建築は横浜から江戸へ持ち出され、和洋折衷という珍妙かつ新しい形で擬洋風建築という形態をとり、流行していったことがわかる。

ところで、江戸、つまり東京の都心部では先述

のように流行していった擬洋風建築だが、擬洋風建築の流行の期間は短かったにしろ、事実都心とは言えない郊外でも多く確認され、現在まで保護されている例は多く見られる。では、東京で流行した後、地方にはどのようにして流行していったのだろうか。

地方での擬洋風建築流行のきっかけとなるのが、1872 (M5) 年の学制発布である。学制を敷く、ということは、学生の人口が増え、それだけの人数を収容する学校が必要となる。どうせ建造するならば、時代の流行に沿った西洋館らしいものを、と人々が考えるのはごく自然なことであり。現在でも地方に現存、もしくは移築されている擬洋風建築作品に学校が多いのはこういった事情も関係している。

顕著に盛り上がりを見せたのが中部地方の長野県、山梨県、静岡県である。例えば、静岡県では、丁髷を結う為に使っていた代金を行政に積み立て、それを小学校建設費に充てる為に、断髪せよという旨の布告が発せられた。これに刺激を受けた山梨県も断髪令を出し、断髪しない者には特別税を課すなど、静岡県と競り合うように西洋化を目指した。この頃に多く用いられたのが漆喰系擬洋風の擬洋風建築であり、擬洋風の時系列的には中期にあたり、この頃が流行のピークとなる。

では、どのようにして収束を迎えたのだろうか。先述したように、擬洋風建築は下見板系擬洋風で流行が打ち止めとなる。前掲『日本の近代建築(上) 幕末・明治編』^(注7)によると、

明治10年になって、学習院が下見板張りに望楼を載せ、唐破風付の車寄せをつけた印象深い姿を見せ(中略)いずれも設計を手掛けたのは大蔵省営繕寮の後進の工部省の営繕課だから、それまで林忠恕の主導の下、木骨石造系の擬洋風をもっぱら作ってきた中央官庁の技術陣は明治十年代に入ると下見板系へと一気に転じたわけである。

とあり、下見板系擬洋風を先導して作り上げていったのは国の営繕課であり、東北地方と東京で多く作られていたようだ。それが徐々に日本全国に飛び火していったようだ。

1897 (M30) 年以降の明治三十年代に入ると、擬洋風建築のデザインは徐々に奇抜性を失くし、擬洋風建築は終息していく。擬洋風建築は人々の好奇心から始まり、好奇心によって広がっていったことを考えれば、明治三十年という節目の時代に、ある程度西洋文化を理解した気になってしまったのだろう。同時に、1879 (M12) 年に開校した建築教育機関の卒業生も徐々に増え、擬洋風建築が“擬”洋風である必要がなくなり、正確に西洋建築を学んだ日本人建築家たちが歴史主義建築のルールにのっとって躍動し始める時代の始まりとも言える。

このように、擬洋風建築が流行した背景には国の事業と狙いと人々の好奇心が重なり合った事実が存在しているのだが、この事から明確にわかることがある。それが、擬洋風建築に限らず、“建築はその時代をそのまま表している”という事である。

2-3. 擬洋風建築の例

建築が時代をそのまま表しているというのなら、擬洋風建築が表現している明治時代とはどのような時代なのだろうか。

和洋折衷という言葉と、先述から度々登場する藤森照信の言葉回しからもある程度想像できるかとは思いますが、一言で表すならば“カオス”である。先も述べたが、江戸時代から明治時代へ変わったといっても後世を生きる我々現代人の意識の中で線引きが成されただけで、実際にその時代を生きた人々が突然洋服を着て、洋食を食べ、ガスの通った馬車通りを歩いたわけではなく、やはり和と洋が混ざり合った文字通り混沌とした状態であったことは間違いない。その状態をより端的に表した建築的表現が“和洋折衷”であると考えられる。

前項目で述べた、擬洋風建築の開祖とも言える清水喜助の擬洋風建築で有名なものが、「築地ホテル館」「第一国立銀行」の二つである。

築地ホテル館は前掲清水建設 HP^(注4)によると、

1868 (慶応4) 年。9月に改元し、明治元年となるこの年、江戸・築地鉄砲洲(現在の中央区築地)に、日本初の本格的洋風ホテル「築地ホテル館」が完成しました。このホテル

は、江戸幕府が外国人専用の宿泊施設として計画したものです。基本設計を米国人建築家リチャード・P・ブリジェンスが、実施設計と施工を二代清水喜助が手掛けました。外壁は、土蔵や武家屋敷の塀などに用いられる海鼠(なまこ)壁※のような和風建築である一方で、屋根の煙突や風向計、建物をめぐるベランダなど、各所に洋風建築の要素を取り入れた和洋折衷の建築様式となっています。※海鼠壁…四角い平瓦を並べて貼り、継ぎ目に漆喰を丸く盛り上げて塗る壁の仕上げ方法。正面入口に、横浜までの乗合馬車の発着場や私設郵便局も設置されていた築地ホテル館は、単なる宿泊施設ではなく、交通、通信の拠点など、交易場としての重要な役割も担いました。



写真1 (前掲清水建設^(注4) HPより、
築地ホテル館外観)

とあり、江戸末期から明治期を代表する擬洋風建築の主格ということがわかる。また、築地ホテル館は1872(M5)年に火災で焼失しており、建築物としての寿命自体は短かったが、後の西洋建築に大きな影響を残した。

次に、第一国立銀行は前掲清水建設 HP^(注4)によると、

築地ホテル館の経験を生かし、二代清水喜助が次に手掛けたのが、日本初の銀行である「第一国立銀行」でした。東京・兜町(現在の中央区日本橋兜町)に1872(明治5)年に完成した建物は、もともとは三井組の銀行として計画されたものでしたが、国立銀行条例の施行によって新設された第一国立銀行に譲

渡されました。木造2層の洋風建築の上に、日本伝統の城郭を思わせる塔屋を載せたその姿は、和洋折衷が進んだ「開化の建築」とも呼べる新しい建築の姿でした。第一国立銀行の初代総監役、頭取を務めた渋沢栄一は、この建物について、「わが国におけるもっとも最初のそして他に類の無い銀行建築である」と述べ、見たこともない銀行建築に果敢に挑戦した二代清水喜助の意気を高く評価しました。第一国立銀行の独創的なスタイルは、擬洋風建築の最高峰に位置するとも言われています。

とあり、清水喜助は国からの正式な学びではなかったとはいえ、擬洋風建築としては類を見ない域のクオリティで西洋建築を模していたと思われる。これらの建築物が擬洋風建築として横浜の居留地から持ち出されたことにより、東京の人々は新時代の到来を実感し、イメージすることが出来たのだ。



写真2 (前掲清水建設 HP^(注4)より、
第一国立銀行外観)

次に、擬洋風建築が最も盛り上がりを見せた最盛期の建築物をいくつか紹介する。

この時期には漆喰系擬洋風の建築様式が多く見られ、初期には東京などの都市部に多く見られた擬洋風建築が地方へと進出していく時期である。また、その流行のきっかけとなったのが1872(M5)年の学制発布による学校建築の需要だった為に、学校建築が擬洋風で作られることが多く見

られた。中でも特に有名なのが、長野県松本市の旧開智学校である。藤森照信監修の『日本の西洋建築』^(注8)によると、

1873 (M6) 年、開智学校は、廃寺の跡地と建物を仮校舎に開校した。今も残る校舎は、1876年に仮校舎を造営改築したもの。1963 (昭和38)年に閉校するまで、約90年にわたって使用された。閉校の翌年、現在の場所に移築した。壁を漆喰塗りにして、柱を隠した寄棟造りの二階建て、棧瓦葺きの屋根に、八角塔がそびえたち、窓には色ガラス。洋風を志向しつつ一つの建物の中に様々な建築要素が混在している。このような海外では類を見ない建築は、棟梁を務めた大工・立石清重が東京の洋館探訪をつぶさに行った功績だ。

とある。また、前掲『日本の近代建築 (上) 幕末・明治編』^(注7)には立石清重の建築のデザインについて文明開化と並べて解説されており、

立石清重の大胆不敵を象徴するのが車寄せの唐破風に舞う二人のエンジェルにほかならない。日本の西洋館はむろん世界の建築にも例を見ないが、それもそのはずで、建築の造形のストックからではなくて怪しげな絵入り新聞の題時から拾ったデザインだった。(中略) 世界の建築でも、通俗的な印刷物の表紙を建物の表玄関に取り込んだ例はないであろう。今で言えば、週刊誌の表紙のモチーフを小学校の入り口に掲げるような大胆さ。清重の気持ちとしては、開化の時代、新しい教育、そして“開智”といったイメージをエンジェルの図像に託したのだろう。

と述べており、擬洋風建築におけるデザインの奇抜性と、それらを可能にする自由度の高さが見て取れる。このように、堅苦しいルールに囚われず建てる棟梁によって自由に発想を具現化することのできるからこそ、擬洋風建築は前例がなくとも流行したといえる。

最後に、擬洋風建築流行の晩期にあたる下見板系擬洋風の例を紹介する。



写真3 (松本市公式観光情報 新まつもと物語 HP^(注9)より、旧開智学校外観)

下見板系擬洋風は、東京で1874 (M7) 年に工部省庁舎として建てられたのが始まりであり、その二年後の1876 (M9) 年に山形県で朝陽学校が作られた。しかし、技術的には後に作られた山形県の下見板系擬洋風の方が充実しており、下見板系擬洋風のメインとなる舞台は山形県であった。山形県では朝陽学校の登場後、下見板擬洋風の建設が組織的に推進され、県庁舎や師範学校など次々に建設されていった。その中には病院も含まれており、この病院があまり病院然としておらず、この時代の形に囚われない風俗をよく表している。山形県山形市に建てられた済生館はこれらの山形における下見板系擬洋風のピークとされている。山形県 HP^(注10)には、

建物は、当時横浜にあったイギリス海軍病院を参考にしたと言われている。中庭を囲んで病室を円形に配置し、正面の塔屋は三層構造の独特の形態になっている。当時の人々は、この建物を親しみをこめて「三層楼」と名づけた。(中略) 木造の擬洋風建築として明治初期の代表的な建物であり、ドアの蝶番や屋根の垂鉛板などはドイツから輸入された。建設は原口祐之を棟梁とし、山形の宮大工と300人の職人たちの手によって僅か7ヶ月で完成した。1878年 (明治11) 7月、山形を訪れたイギリス人のイザベラ・バードは、完成間近のこの建物を見て「大きな二階建の病院は、丸屋根があって、150人の患者を収容

する予定で、やがて医学校になることになっているが、ほとんど完成している。非常に立派な設備で換気もよい」と評している。」

とある。また、前掲『日本の近代建築（上）幕末・明治編』^(注7)には、

病院としては類まれな形をしている。平面波十六角形のドーナツ型で、その前面に四層の塔が立つが、各層ごとに平面形が異なり、まるで積木でも積み上げたような凹凸を見せる。色彩も派手で、赤みの強いクリームを地に使い、柱や軒や窓回りといった枠組みとなる部分には濃い茶色を当て、二階の扁額には濟生館の三文字が金色に輝く。

とあり、いかにイレギュラーでオリジナリティの溢れる風貌をしているかがわかる。

このように、擬洋風建築は初期、中期、晩期と大まかな共通点で木骨石造系擬洋風、漆喰系擬洋風、下見板系擬洋風と分類することができるが、あくまで大まかな共通点でしかなく、実際に建てられた建築物を見ていくと、ここに挙げた数軒でもデザインの一貫性のなさが窺える。この一貫性のなさが擬洋風建築の醍醐味とも言える点だが、逆に、定義づけを難しくしている要因でもあるのだ。



写真4 (山形県 HP^(注10) より、旧濟生館本館外観)

第3章 結論

3-1. 文明開化との関係性

これまで、擬洋風建築の定義や議論、流行とその例と、文明開化そのものについて論じてきたが、この項目では擬洋風建築と文明開化の直接的な関係について考えていく。

まず、先述したとおり、文明開化は日米和親条約、日米修好通商条約から始まった日本と諸外国の貿易上の国際交流が発端だが、その際諸外国の衣・食・住文化が日本に流入したことで始まった。さらに、貿易のために外国人居留地が置かれたことで、実際に日本国内で外国人が自国の衣・食・住を行っていくという状況になる。つまり、日本国内に小さな外国が出来るということだ。これにより、日本という島国はより日常的に、具体的に外国文化に触れることとなる。その文化の中の“住”の部分が、西洋建築という形で日本に刺激をもたらしたのだ。しかし、ある程度産業を行っていくうえで基盤が出来上がっていなければ、突然流入した外国の技術力に追いつけるはずもない。では何故、日本は明治という数十年という短い期間で列強の仲間入りを果たしたのだろうか。

藤森照信は『人類と建築の歴史』^(注11)の中で

鎖国中の江戸時代に政治も経済も文化も技術も充実をみせ、産業革命前夜にまで近い状態に達していた

と述べており、日本は開国以前から外国の技術力を受け入れるだけの基盤は整っていたとされている。実際その通りで、日本は鎖国中、外国船を制限しては居たが、その一切を禁止していたわけではない。その為、江戸時代にも南蛮物という呼称で諸外国の製品は日本に流入していたし、平賀源内による発明にも南蛮の影響が多く見受けられる。この事から、開国によって文明開化がもたらされたこと自体は間違いではないが、それ以前から日本の産業は覚醒間近な状態にまで整っていたことは確かだろう。

覚醒間近だった産業を、開国により諸外国からの影響を受け、そのレベルまで引き上げる為には、諸外国の産業の発展状況を学び、模倣するの

が妥当であろう。その為には、諸外国の技術・機械、そしてそれらを収容し、実働させる建物が必要だった。これが西洋建築と文明開化の直接の関係性である。

では、西洋建築の中の一つである擬洋風建築は文明開化とどのような関係性を持つのだろうか。擬洋風建築はその名の通り“擬”なぞらえる建築物である。藤森照信は前掲『日本の近代建築（上）幕末・明治編』^(注7)の中で、

まず、無知であったことは否めない。木造建築の伝統に育まれた日本の大工にとって、石に由来する西洋館は最も遠い建築にほかならないし、そのうえ彼らは正確に学習しようという気持ちにかけ、見よう見まね以上の西洋館の知識はなかったと考えていい。

と述べており、実際、これまで紹介してきたとおり、擬洋風建築はその建築様式やデザイン性、設計を評価されているというよりも、擬洋風建築が成立した文化的背景そのものを評価されていると考えられる。さらに、藤森照信は同書の中で

擬洋風建築が江戸時代につながるのは、和洋折衷によってではなく、棟梁たちの想像力を通してである。繰り返し述べてきたように、擬洋風建築はヨーロッパの建築を正しく再現しようとしたわけでも日本の伝統を新時代に再生させようとしたわけでも、かといって和洋折衷をねらったのでもない。

とあり、擬洋風建築を作りあげていった棟梁たちは長く日本の“建築”を守ってきたが、新しく入ってきた西洋建築を淘汰しようとしていたわけでも、日本を西洋建築で染め上げようとしていたわけでもなく、明治新政府が掲げた富国強兵をより確固たるものにしようとする政治的思惟、それに準ずる新制度に寄り添うものだったと考察する。さらに、それらを享受するのは国の中心たる行政ではなく、国に住む人々である。その人々の受容なしにはいくら国が文明開化、富国強兵、産業革命を掲げ、列強入りを目指したところでそれらは果たせなかつただろう。それらを実現する

為のツールとして、擬洋風建築は欠かせない存在だったと言える。

3-2. 擬洋風建築や洋風建築の保存活動

これまで擬洋風建築とその他の洋風建築について述べてきたが、現在それらの近代建築がどのように保存・保護されているかを紹介しておこうと思う。

まず、それらを積極的に行っているのは擬洋風建築や洋風建築が都心部だけでなく日本全国に分布しているということもあり、基本的には各自治体が行っていることが多い。該当自治体が直接行っていない場合でも、自治体が公共団体などに依頼している場合も多く見られる。兵庫県の三田市は、前掲「NPO 法人歴史文化財ネットワークさんだ」(注3)などのNPO法人に依頼している。自治体や団体によって差異はあるが、近代建築は近世以前の建築よりは損傷が少なく、丈夫でもある為、稀にカフェやレストランなどの店になっていることもある。

また、公共事業などの何らかの理由でその場を明け渡さなければならない場合や、自治体が近代建築の保存・保護がままならない場合は、移築という形で近代建築を保存している。その代表格として挙げられるのが前掲博物館明治村^(注2)である。博物館と銘打ってはいるが広大な敷地に様々な建築物が展示されており、敷地面積だけならば日本のテーマパークの第3位にランクインする。

このように、建築物というのは近代建築に限らず、その規模が遺産として桁違いである為に、保存・保護する為には決して小さくはない額の金銭が必要になってくる。

近年ではこれらの近代建築も文化遺産として認定され、世間でも注目されることが増えたが、未だに保護される優先順位は低い。この問題を解決するために、近代遺産に人々の関心が向くように自治体や団体がメディアを駆使し、様々な努力を行っているが、今後どのように展開されていくのが非常に楽しみな分野である。

おわりに

西洋建築の中の一分類である擬洋風建築だが、文明開化と深く関係し、日本と諸外国が繋がる架け橋としていかに重要な役割を担っていたかは明確である。西洋建築という広い視点から出はなく、擬洋風建築という日本独自の建築様式から透けて見える当時を生きる日本人の文化や考え方は、他のアジア圏の西洋建築からは読み取れない奇特性があり、日本人の特徴がにじみ出ている。和洋折衷という形で居留地という小さな外国から飛び出していった擬洋風建築だが、その突発性とは裏腹に、流行の背景には幾重にも重なった要因が存在した。政治・経済・社会・文化など、全てを内包するいわば史料となるのが、建物であり。建物の表面だけを見るのではなく、より深くその建物を探っていくと、その時代の人々の見ていた世界を脳裏に思い浮かべることが出来る。

戦争や天災によって失われた建築物はもう戻ることはいないが、これ以上建物という近代日本や世界を知るための史料を失くさない為にも、今回の卒業論文を通して近代日本を知れたのは有意義だった。

近代史に関心を持つ人々はやはり、他の時代に比べて朝ドラやアニメなどで人気が出てはやはり少ない。現代日本の最も直接的な基盤となる近代に、もっと多くの人に関心を持ってもらい、大切にしてもらわなければならないと改めて感じた。

謝 辞

本稿は、本学より奨学金の援助を受けドイツへ行き調査した内容も含まれております。また、各洋風・擬洋風建築の博物館の学芸員や解説員の方々のご協力があり完成したものです、記して深く御礼申し上げます。

注

(注1) ノートルダム清心女子大学上田恭嗣
<http://www.ndsu.ac.jp/department/human/blog/2017/08/post-56.html>

上田恭嗣 (うへだ やすつぐ)

1951年生れ ノートルダム清心女子大学
人間生活学部 人間生活学科教授

(注2) 博物館明治村

<http://meijimura.com/sp/>

敷地面積 約 100 万 m²

南北 約 1100 m

東西 約 620 m

移築展示建造物件数 67 件 (重要文化財
11 件、愛知県指定文化財 1 件)

以下公式 HP より引用

「明治時代は、我が国が門戸を世界に開いて欧米の文物と制度を取り入れ、それを同化して近代日本の基盤を築いた時代で、飛鳥・奈良と並んで、我が国の文化史上極めて重要な位置を占めている。明治建築も従って江戸時代から継承した優れた木造建築の伝統と蓄積の上に、新たに欧米の様式・技術・材料を取り入れ、石造・煉瓦造の洋風建築を導入し、産業革命の進行に伴って鉄・セメント・ガラスを用いる近代建築の素地を築いた。これらの建築のうち、芸術上、歴史上価値あるものも、震災・戦災などで多く失われ、ことに戦後の産業の高度成長によって生じた、大小の公私開発事業により、少なからず姿を消していった。取り壊されてゆくこれらの文化財を惜しんで、その保存を計るため、今は二人とも故人とされたが旧制第四高等学校同窓生であった谷口吉郎博士 (博物館明治村初代館長) と土川元夫氏 (元名古屋鉄道株式会社社長) とが共に語り合い、二人の協力のもとに明治村が創設されたのである。」

(注3) NPO 法人歴史文化財ネットワークさんだ
<https://www.kyukukike.com/%E6%97%96>

[A7%E4%B9%9D%E9%AC%BC%E5%AE%B6%E4%BD%8F%E5%AE%85/%E8%A9%B3%E7%B4%B0%E8%AA%AC%E6%98%8E/%E6%93%AC%E6%B4%8B%E9%A2%A8%E5%BB%BA%E7%AF%89/](https://www.shimz.co.jp/topics/construction/item15/content01/)
以下 HP より引用

「旧丸鬼家住宅資料館」及び「三田ふるさと学習館」は三田市の施設です。「NPO 法人歴史文化財ネットワークさんだ」が三田市から委託された指定管理者として管理運営をしています。」

(注 4) 清水建設

<https://www.shimz.co.jp/topics/construction/item15/content01/>

以下 HP より引用

「清水建設の創業は 1804 年。越中富山の 大工であった初代清水喜助が江戸・神田鍛冶町で開業したことに始まります。初代喜助が創業当時から目指したのは、「誠心誠意、心を込めて仕事に取り組み、良いものをつくって信頼されること」。そして今、清水建設は、お客様、そして社会のニーズに応えるため、常に新しい知識や技術を追究しています。」

(注 5) 藤森照信『近代日本の洋風建築〈開化篇〉』2017/2/20、筑摩書房より出版

藤森照信（ふじもりてるのぶ）

1946 年生れ 建築史家、建築家（工学博士）。東京大学名誉教授、東北芸術工科大学客員教授。東京都江戸東京博物館館長。専門は、日本近現代建築史、自然建築デザイン。日本建築学会の建築歴史・意匠委員会委員を歴任。

主な著作は、『明治の東京計画』『日本の近代建築』『丹下健三』

(注 6) 「建築史」編集委員会編著『コンパクト版建築史 日本・西洋』

2017/9/10、彰国社より出版

(注 7) 藤森照信『日本の近代建築（上）幕末・明治編』1994/4/5、岩波書店より出版

(注 8) 藤森照信・丸山もとこ監修『日本の西洋建築』2011/7/1、学研パブリッシングより出版

(注 9) 松本市公式観光情報 新まつもと物語

HP<https://visitmatsumoto.com/spot/kaichischool/>

以下 HP より引用

「松本市は観光を重要産業と位置づけ、2004 年に観光戦略本部を置いて観光政策に力を注いできました。その際に、市民団体が運営する観光サイトの種が生まれました。「松本市を訪れた観光客に楽しんでもらうためには、街そのものが元気でなければならない」という考えのもと、市民や観光に携わる人びとが楽しみながら観光情報を提供するサービスがスタートしました。」

(注 10) 山形県 HP

http://www.pref.yamagata.jp/ou/shokokanko/110001/him/him_15.html

(注 11) 藤森照信『人類と建築の歴史』

2005/5/10、筑摩書房より出版